

語彙的な語形成と統語的な語形成
—— 日本語や朝鮮語などの膠着言語の類型論的研究 ——

塚本秀樹 (愛媛大学法文学部)

E-mail: htsuka@LL.ehime-u.ac.jp

1. はじめに

近年、言語学では、形態論及び語形成に関する研究の隆盛が著しい。形態論から他の部門に目を向けて文法全体を見渡す取り組みがなされるようになってきた。本稿は、その中でも形態論と統語論の関係に着目しながら、日本語や朝鮮語などの膠着言語における語形成の様態について類型論的に考察することを目的とする。筆者は以前、日本語、朝鮮語、トルコ語における接辞を用いた使役構文について考察し〔Tsukamoto (1986)、塚本 (1995)〕、日本語と朝鮮語における複合動詞構文の状況が両言語における使役構文の状況と平行的であることについて論じた〔塚本 (1995)〕。本稿では、このような各言語間の状況と平行的な状況を示す言語現象がさらにいくつかあることを指摘し、この考察内容からいかなることが言えるか、ということについて論述することにした。

2. 「～後(に)／～ hwu(-ey)」 「～中(に)／～ cwung(-ey)」 「～の際[折](に)／～ ttay(-ey)」などを用いた構文

Shibatani and Kageyama (1988)、影山 (1993) などは、日本語における「～後(に)」 「～中(に)」 「～の際[折](に)」などを用いた構文について非常に興味深い考察を行っているが、その中で本稿における議論に関連する内容を振り返ることにする。

(1) a. 学生が朝鮮語を勉強中に…

b. 日本へ行くなら、学位を取得後がいい。

これらの例において「～を」といういわゆる直接目的語の出現が認められる、という点に注目したい。なぜ「～を」という直接目的語が出て来ることができるのであろうか。このような構文にどのような構造を設定するのが最も妥当であるか、ということも考察しなければならない問題であるが、どのような構造を設定するにしても、「～後(に)」 「～中(に)」 「～の際[折](に)」などの語形成がなされる際には、統語的な操作が行われていると考えなければ、「～を」という直接目的語が出現可能であることに適切な説明は与えられない。

日本語における「～後(に)」 「～中(に)」 「～の際[折](に)」に相当する朝鮮語の表現は、ほぼ平行的に ～ hwu(-ey), ～ cwung(-ey), ～ ttay(-ey) となる。(1) に挙げた日本語の例を、文字どおりそのまま朝鮮語に翻訳すると、(2) のようになる。

(2) a. ?Haksayng-i cosenmal-ul kongpu-cwung-ey … 〈学生が朝鮮語を勉強中に…〉

b. ?Ilpon-ey ka-lye-myen hakwi-lul chwituk-hwu-ka cohta.

〈日本へ行くなら、学位を取得後がいい。〉

ところが、この朝鮮語文は、日本語の場合のように認められなかったり、それに比べると、不自然であったりする。認められるようになるためには、(3) のように連体形の動詞が hwu 〈後〉, cwung 〈中〉, ttay 〈際[折]〉 という名詞を修飾する形式で表現しなければならない。

(3) a. Haksayng-i cosenmal-ul kongpuhanun cwung-ey …

〈学生が朝鮮語を勉強している間に…〉

b. Ilpon-ey ka-lye-myen hakwi-lul chwitukhan hwu-ka cohta.

〈日本へ行くなら、学位を取得した後がいい。〉

また、認められにくい(2)でも、格助詞 -lul/-ul 〈を〉を省略して表現すれば、多くの場合、認められるようになる。

(4) a. Haksayng-i cosenmal kongpu-cwung-ey … 〈? 学生が朝鮮語勉強中に…〉

b. Ilpon-ey ka-lye-myen hakwi chwituk-hwu-ka cohta.

〈日本へ行くなら、学位取得後がいい。〉

他方、トルコ語は、(5) のように日本語の(1) に似た表現形式が可能である。

(5) a. Ali'yi ziyaretten sonra … 〈アリを訪問後…〉

アリ-対格 訪問-奪格 後

b. Arabayı tamir sirasında … 〈車を修理中…〉

車-対格 修理 間-3人称単数-介入音-位格

以上、見てきたことから、次のような帰結が得られる。朝鮮語では、kongpu 〈工夫: 「勉強」の意〉, chwituk 〈取得〉 などといった漢語名詞と、hwu 〈後〉, cwung 〈中〉, ttay 〈際[折]〉 の組み合わせが形成される時、日本語の場合とは違い、(2) のように統語的な要素である格助詞の -lul/-ul 〈を〉 が現れにくいわけであるから、統語的な操作が行われているとは考えられない。表現可能な(4)は

名詞が連なる複合名詞の構造になるので、この形成に当たっては語彙的な操作だけで事が足りる。従って、形態上は言語間で同様であっても、語形成の点では、朝鮮語は語彙的な手段をとり、日本語とトルコ語はそれに加えて統語的な手段もとり、といったように異なるのである。

3. 名詞化接尾辞

影山 (1993) は、日本語におけるいくつかの名詞化接尾辞について考察し、その一つの「～さ」について次のような指摘を行っている。

(6) a. 男は、酒代が欲しさに強盗をはたらいた。

b. 少年は、東大に入りたさのあまり、試験問題を盗み出した。

前置された名詞を表示するのに許される格助詞は「の」ではなく、それ以外のものであり、これらの格助詞は、「～さ」と結び付いている「欲しい」や「入りたい」などそれぞれの述語が格支配で要求して出て来ているものである。形態上一つの語となっている「～ぶり」「～ごろ」「～手」とそれぞれの述語との結び付きは、語彙的な派生の過程を経て形成されるのに対して、「～さ」とそれぞれの述語との結び付きは、「～ぶり」「～ごろ」「～手」の場合と同様に形態上一つの語となっているが、それが形成される際には統語的な派生の過程を経ていると考えなければ、どうしても妥当な記述・説明は与えられない。

一方、朝鮮語は、日本語の名詞化接尾辞「～さ」に相当すると考えられるものとして $\sim(u)m$ を有する。ところが、例えば (7a) の日本語文を、それをういた朝鮮語で表現すると、(7c) のようになるが、これらは許容されない。 $\sim(u)m$ をういた上に、それが付け加えられた述語が格支配で要求する格助詞である $-ka/-lul$ (が/を) が現れるのは、不可能なのである。認められる朝鮮語にするには、(7b) のように $nomo-senswu\{-ka/-lul\}$ $po-ko$ $siphe-se$ (野茂選手 {が/を} 見たくて) という文として表現しなければならない。

(7) a. 彼は野茂選手 {が/を} 見たさにロサンゼルスまで行った。

b. $Ku-nun$ $nomo-senswu\{-ka/-lul\}$ $po-ko$ $siphe-se$ $losuaynceylleyse-kkaci$ $kassta$.

c. $*Ku-nun$ $nomo-senswu\{-ka/-lul\}$ $po-ko$ $siph-um-ey$ $losuaynceylleyse-kkaci$ $kassta$.

朝鮮語では、明らかに文と認められる表現か、明らかに語と認められる表現かのどちらかが用いられる。構成要素の地位が明らかであるので、その派生過程も、前者は統語的なもの、後者は語彙的なものとはっきりしている。朝鮮語には、日本語の名詞化接尾辞に相当するものがほとんどないため、形態上、語と見なされる要素が形成される際、統語的な派生の過程を想定しなければならない、といったことは自ずと生じなくなる。これは、日本語の場合と違い、朝鮮語における動詞の連用形には名詞としての機能がなく、ということとも大いに関係していると考えられる。

4. 照応

一般的に、語の内部の要素を代名詞で指示することはできないことが知られている。

(8) *頑張って餅つきをしたのに、それはあまりおいしくなかった。

さらに、代名詞が複合語の内部に現れることも、一般的には許されない。

(9) *それ探し (←宝探し)、*あそこ旅行 (←アメリカ旅行)

ところが、日本語では、数は少ないが、それが可能な場合があることが指摘されている〔柴谷 (1992: 221)、影山 (1993: 11)〕。

(10) a. それ待ち b. (今夜は) そこ泊り c. そこ行き (の電車)

(11) a. この電車はここ止まりです。 b. あの好みデザインの

この例で言えることは、「～待ち」「～止まり」などの語のレベルにおいて照応という統語的な操作が行われている、ということである。

それに対して、朝鮮語では、(10) (11) のように複合語の中に代名詞を入れて表現することは全くできない。例えば (10c) (11b) を朝鮮語に訳すと、

(12) a. $keki$ $kanun$ $cencha$ (直訳: そこに行く電車)

b. ce $salam-i$ $cohahanun$ $ticain$ (直訳: あの人が好むデザイン)

のように文を用いた表現をとることになる。従って、朝鮮語では、語のレベルにおいて照応という統語的な操作が行われることはないのである。これは、前節で名詞化接尾辞について見た際に指摘したのと同様に、朝鮮語における動詞の連用形には名詞としての機能がなく、という日本語との相違とも関わっていると思われる。

5. 接頭辞

影山 (1993: 338-346, 1995a, 1995b) は、日本語の接頭辞「同～」「前～」「元～」などについて考察を行っているが、ここでは、特に「同～」に注目したい。例えば、次のような例が挙げられてい

る。

(13) 英国で初の競馬学講座が、同国南西部にあるブリストル大学に誕生した。「同国南西部」は形態上、語であると認められる。その一部である「同」は先行詞の「英国」を指していると解釈され、文脈照応という統語的な操作が行われている。日本語における「同」のこういう用い方は、次に示すように他にも頻繁に見出され、生産的であると言える。

(14) 同氏、同社、同店、同教授、同研究所、同センター、同首相、同大統領、同容疑者、……日本語と同様に、朝鮮語にも漢語の *tong* 〈同〉があるので、(14) の日本語をそのまま朝鮮語で表現すると、次のようになる。

(15) **tong-ssi* 〈同氏〉、**tong-sa* 〈同社〉、**tong-cem* 〈同店〉、? *tong-kyoswu* 〈同教授〉、? *tong-yenkwuso* 〈同研究所〉、? *tong-seynthe* 〈同センター〉、**tong-swusang* 〈同首相〉、**tong-taythonglyeng* 〈同大統領〉、**tong-yonguyca* 〈同容疑者〉

ところが、このように、朝鮮語の場合は日本語の場合と異なり、中には言えなくもないものが存在するものの、総じて困難である。朝鮮語では、出て来た名詞を繰り返して用いたり、それを代名詞で指したりして表現するのが普通であり、実際の文章からも *tong* 〈同〉～ を用いたものはほとんど見出せない。よって、朝鮮語では、*tong* 〈同〉を文脈照応という統語的な操作をするのに用いることは日本語よりもはるかに難しいと言える。また、トルコ語にも、一般的にはこのような接頭辞はない。

6. 主張

影山 (1993: 1-7) は、語形成はどこで行われるか、という問題に取り組んできたこれまでの諸研究を、次のように大きく三つの説に分類できることを指摘している。

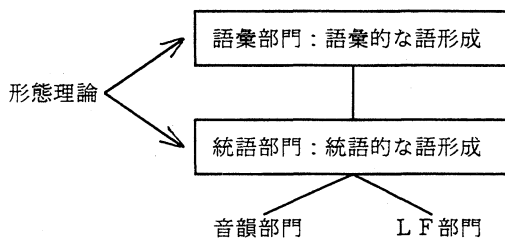
(16) (A) 変形論 — 語形成規則は一般の統語規則と相俟って働き、レキシコンは語彙項目を登録したものに過ぎない。

(B) 極端な語彙論 — あらゆる語形成規則が、統語部門とは独立の語彙部門で働く。

(C) 両立論 — 語形成は基本的には語彙部門の操作であるが、統語部門（あるいは音韻部門）にも起こり得る。

そして、影山 (1993) などは、本稿の議論にも引用した日本語における種々の現象について記述・説明を行うには、三つの説のうち (C) の「両立論」が最も適切であることを論述し、結論的には、次に示される「モジュール形態論による文法モデル」というものを提唱している。

(17)

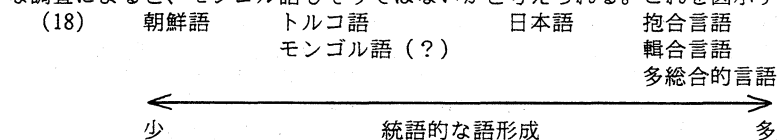


ところが、本稿における以上の考察で次のようなことが明らかになった。統語的な語形成が日本語では比較的活発に行われるのに対して、朝鮮語ではほとんど行われない。朝鮮語の語形成は、もっぱら語彙的なものである。

これはさらに、次のように言うことに至る。日本語における言語事実からすると、確かに影山が提唱するようなモジュール形態論による文法モデルを採用しなければ、妥当な処理の仕方は得られない。しかしながら、三つの説のうちの (B) の「極端な語彙論」は主に英語を考察の対象として提案された考え方であるが、英語と同様に朝鮮語の場合は、日本語に比べると、この説でもあまり問題なく処理できることになる。たとえ朝鮮語に (17) のようなモデルを適用しても、形態理論から統語部門に向かう矢印の部分はほとんど作用しないのであり、その存在の意味が問われる。

従って、膠着言語といった同じ範疇に属すると考えられる言語でも、語形成が行われる場所については程度の差がある、ということも明らかになったわけである。上述したように、日本語と朝鮮語を比べれば、前者の方がはるかに頻繁に統語的な語形成を行う。また、抱合言語・輯合言語・多総合的言語と呼ばれる言語は膠着言語より膠着性がさらに発展したものであり、その代表としてアメリカ・インディアン諸言語、エスキモー語、アイヌ語などがあるが、Baker (1988, 1996) などで考察されているように、こういった言語における統語的な語形成は非常に活発である。¹⁾ 膠着言語の中でも、統語的な語形成について言えば、日本語が最も抱合言語・輯合言語・多総合的言語に近い存在である。それに対して、朝鮮語が最も遠いところに存在する。また、トルコ語は、本稿及び林 (1995)、Kuribayashi (1996) の考察から日本語と朝鮮語の間に位置すると言えそうであり、²⁾ 筆者の予備的

な調査によると、モンゴル語もそうではないかと考えられる。これを図示すると、次のとおりである。



影山(1993)がモジュール形態論による文法モデルを提唱するのに考察の対象としている言語は、英語と趣を異にする日本語のみである。上述のことを考え合わせると、本稿で取り上げた言語以外のいろいろな膠着言語について詳しく調査し、さらには膠着言語との関連で抱合言語・輯合言語・多総合的言語も視野に入れ、言語類型論的なアプローチで研究を進めていくことが不可欠となる。その結果が出た上で、改めて影山(1993)による文法モデルを検討し直さなければならない。これは、今後の大きな課題である。

【注】

- 1) 柴谷(1992)と影山(1993: 第6章)は、抱合言語・輯合言語・多総合的言語において従来、統語的に派生されると考えられてきた現象の中にはそのように考えるための積極的な根拠が見出せず、語彙的に派生されると捉えられるものがあることを論じているが、本節で述べているアプローチをとって考察することにより、その妥当性が確かめられることにもなる。
- 2) 林(1995)、Kuribayashi(1996)はそれぞれ、トルコ語に本稿で扱った現象以外の現象で統語的に派生されると考えられるものがあることを指摘し、考察している。

【主要参考文献】

- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Baker, Mark C. (1996) *The Polysynthesis Parameter*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- 林徹(1995)「現代トルコ語の Possessive Compound について」『東京大学言語学論集』14、pp. 463-479、東京大学文学部言語学研究室。
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎(1995a)「形態論と統語論のはざま」『未発』第1号、pp.1-5、ひつじ書房。
- 影山太郎(1995b)「文と単語」『日本語学』第14巻第5号、pp.12-20、明治書院。
- Kuribayashi, Yuu. (1996) "Non-Lexical Compounding in Turkish." *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, No.11, pp.167-181.
- 柴谷方良(1992)「アイヌ語の抱合と語形成理論」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』pp.203-222、三省堂。
- Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) "Word Formation in a Modular Theory of Grammar: Postsyntactic Compounds in Japanese." *Language*, Vol.64 No.3, pp.451-484.
- Tsukamoto, Hideki (1986) "On the Interaction of Morphology and Syntax of Agglutinative Languages —A Contrastive Study of Japanese, Korean, and Turkish—." *Linguistic Research*, 5, pp.25-40. Kyoto: Kyoto University Linguistics Circle.
- 塚本秀樹(1995)「膠着言語と複合構造——特に日本語と朝鮮語の場合——」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp.63-85、くろしお出版。
- 塚本秀樹(近刊)「語彙的な語形成と統語的な語形成——日本語と朝鮮語の対照研究——」『国立国語研究所報告 日本語と外国語との対照研究IV 日本語と朝鮮語 〈下巻〉研究論文編』くろしお出版。

【付記】

トルコ語については、栗林裕氏からいろいろと御教示を頂いた。朝鮮語とトルコ語のインフォーマント調査では、それぞれ李香叔氏と Ismail Altuncu 氏に大変お世話になった。これらの方々に厚く感謝の意を表する次第である。なお、本稿は、1995年度科学研究費補助金奨励研究(A)による研究成果の一部である。